『一条摂政御集』部分的小考四題

堤　和博

藤原伊尹の私家集『一条摂政御集』に関しては、既に次の拙稿を発表している。便宜上、(あ)～(う)としておく。

(あ)『一条摂政御集』論―「とよかげ」の部の特質―（『詞林』2・一九八七年一一月）

(い)『一条摂政御集』の他撰部についての一考察―詞書を中心として―（『詞林』8・一九九〇年一〇月）

(う)歌語りから「とよかげ」の部へ―『一条摂政御集』の好古女関連歌を中心として―（『語文』58・一九九二年四月）

本稿は、これら拙稿では述べられなかった、『一条摂政御集』の部分的な問題に関する小考を纏めて示すものである。

ところで、『一条摂政御集』は冒頭四十一首が物語的に構成されているので有名だが、全体の構成を下段のように捉えて、私に名称を与えておく。特に他撰部後半部を下のように分けたことについては、拙稿(い)を参照願う。

1～41番　「とよかげ」の部
42～192番　他撰部
　42～119番　（他撰部）前半部
　120～192番　（他撰部）後半部
　　120～151番　（他撰部）後半部㊤
　　152～164番　（他撰部）後半部㊥
　　165～192番　（他撰部）後半部㊦
193・194番　『拾遺集』歌補遺部

一　「とよかげ」の部のI段、特に1番歌について

本節では特に新見解を述べるわけではない。「とよかげ」の部に関する拙稿(あ)の一部を訂正すると同時に、従来からの見解を補強するものである。

「とよかげ」の部では、実際には伊尹とみられる男主人公

を「おほくらのしさうくらはしのとよかげ」（大蔵の史生倉橋豊蔭）なる「くちをしきげす」（口惜しき下衆）（ともに序文からの引用。[2] 漢字表記は通説による）に仮託しているのだが、晩年乃至没後に一条摂政、謙徳公とまで呼ばれた伊尹を斯様な人物に仮託できるのは本人以外にないとの理由から、「とよかげ」の部は伊尹自撰が通説となっている。[3] また、とよかげが恋する女は全部で八人出てくるが、その相手の女によって、「とよかげ」の部を表一のような八段に分けておく。

表一（「とよかげ」の部の八段）

	段	歌番号
A部	Ⅰ　いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど	1・2
	Ⅱ　みやづかへする人にやありけん、とよかげ「ものいはむ」とて	3～7
	Ⅲ　とよかげ、おほゐのみかどわたりなりけるひとにかよひける	8～11
	Ⅳ　とよかげ、また、しのびてすみわたりける人に	12～20
	Ⅴ　ものゝえありて、このおきな、うちわたりなりける人に、ものいひけり	21～23
B部	Ⅵ　おきな、にしの京わたりなりける女にものなどいひて	24～30
	Ⅶ　とよかげ、なかのみかどわたりなりけるをんなを	31～40
	Ⅷ　このおきな、たえてひさしうなりにける人のもとに	41

（注―A部・B部については、注1参照）

本節では「とよかげ」の部のⅠ段、特に1番歌について考察するが、Ⅰ段は次のようになっている。序文も併せて示す。

Ⅰ段

おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかゝりけるとき、女のもとにいひやりけることゞもをかきあつめたるなり。おほやけごとさわがしうて、「をかし」とおもひけることゞもありけれど、わすれなどして、のちにみれば、ことにもあらずぞありける。いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど、ゝしつきをへてかへりごとをせざりければ、「まけじ」とおもひていひける。

1　あはれともいふべき人はおもほえでみのいたづらになりぬべきかな

女、からうじてこたみぞ

2　なにごともおもひしらずはあるべきをまたはあはれとたれかいふべき

はやうの人はかうやうにぞあるべき。いまやうのわかい人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし。

Ⅰ段、特に1番歌に関して拙稿(あ)で次のように述べている。

注目すべき点の第二は、一番に「あはれとも」の歌をもってきていることである。この歌は後に『拾遺抄』『時代不同歌合』『百人一首』『八代集秀逸』等にも採られたほどの歌である。おそらく伊尹も相当の自信をもっていたであろうから、これによってやっと返事を得られたという、この秀歌の手柄をここで強調せんとしているのだろう。

即ちこの序章的歌群の意図は、とよかげのことを、業平の様に歌も上手で、女に対する情熱ももっている男だと紹介することにあるのだとみてとれる。

要は、1番歌を伊尹も名歌と思っていたであろうことが、後の時代の秀歌撰に採られていることからも伺え、そんな歌を詠めたとよかげ、ひいては伊尹の力量を示さんとするのがⅠ段の意図でもあると言いたかったのである。しかし、今改めて考え直すと、伊尹自身も含めた伊尹の時代の1番歌に対する評価を考える際には、後の時代の秀歌撰に採られていることは、別問題として扱うべきだと思う。

例えば定家が『百人一首』に1番歌を採ったのには、島津忠夫氏(4)が指摘する次のような思いが定家にあった為であろう。

『一条摂政御集』（一名、豊蔭）という物語性をそなえた家集の巻頭にあるこの歌からは、定家も歌物語の主人公を思いうかべて興味をもったことと思われる。謙徳公の歌が、『新古今集』に十首、『新勅撰集』に九首とかなり多くとられていることも、この物語的な家集の出現と深い関係があり、『新古今集』の撰者名記号から必ずしも定家だけの興味ではなかったようであるが、定家もこの歌を『八代抄』のほかに、『八代集秀逸』にも選んでいて高く評価していたことが知られるのである。

さらに島津氏は補注で次のようにも述べる。

沼田純子氏「一条摂政謙徳公の歌一首」（「叙説」12　昭和六十一年三月）に、「相手の心情や立場を思い遣る余裕もなく、おのれひたぶるなる心に任せて女三宮に言い寄る柏木の心ざまは、御集のとよかげにいささか異なるものではない」と言われている。定家も、この歌から『源氏物語』の柏木の心情を思いうかべていたかもしれない。つまり、伊尹の歌一首を選ぶ時、物語的な「とよかげ」の部の冒頭を飾っていることが大きな要因となったというわけで、加えて、『源氏物語』で援用されていることも要因となったかも知れないというのである。もっと言えば、別の歌を伊尹が「とよかげ」の部の冒頭にもってきていればその歌を定家も選んだかも知れない、また、紫式部が『源氏物語』で1番歌を利用しなければ別の歌が選ばれていたかも知れない、そんな可能性も捨てきれないということでもあると思う。勿論そ

の歌を定家が評価していたのが前提条件だが。

端的に言い直せば、島津氏も繰り返し指摘する通り、『百人一首』は定家晩年の好みで選ばれた―伊尹歌撰歌にあたっては、物語に対する嗜好が大きく影響しているわけである―ものであり、そこに選ばれていることと、伊尹の時代にも名歌と評価されていたかどうかは、別問題として考えなくてはならないのである。定家の他の秀歌撰に採られているのも、『百人一首』に準じて考えるべきであろう。

さて、伊尹の時代における1番歌に対する評価を考え直さなくてはと思ったのには、1番歌には特にこれと言った目立った技巧等が凝らされていないからでもある。言わば1番歌は素直な詠み振りの歌なのである。

そうすると、また秀歌撰に戻るが、1番歌が『拾遺抄』に採られたことに関連して、「はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん」[5]という『古今集』には採られなかった壬生忠岑の歌が、『拾遺抄』『拾遺集』の巻頭を飾り、『和歌九品』でも「上品上」に挙げられた事実が思い合わされる。この歌は、立春と霞といった観念的な季節感に裏打ちされているという意味においては典型的な古今的な歌であるが、特に技巧もない素直な詠み振りであった為か、古今時代の評価は芳しくなかったらしく、評価が高まるのは、このような歌が称揚されるようになった拾遺時代を待たなくてはならなかったのである。[6] 1番歌も同時代の『後撰集』に採られなかったのであるが、そのことについては当時の評価以外にも勘案すべき要素もあるであろうが、いずれにせよ、『拾遺抄』に採られたのは素直な詠み振りが拾遺時代の好尚に合ったからとみるべきで、1番歌に対する当時の評価はやはり別に考えなくてはならない。

そこで取り敢えず、既に論じられている伊尹の歌風を確認しておきたい。

片桐洋一氏[7]は『一条摂政御集』の伊尹歌の歌風として、主に私に纏めた次の三点を挙げている。（波線は引用者）ちなみに、これらの特徴は後撰時代の褻の歌風と重なるもので、特に『一条摂政御集』の歌の特徴として目立つものだと言う。

(1)「場面、具体的な詞書に和歌が支配される」

(2)「口語的要素が甚だ強い」「必ずしも口語的とは言えぬにしても、非歌語的な、つまり和歌的表現には全く異質な言葉が用いられることも多い」

(3)「既成の歌語、あるいは既にまとまって一つの和歌的雰囲気を表わすようになっている熟語の類いをそのまま利用することもまた多い」[8]

また、遠藤由紀氏[9]は、片桐氏の言葉でいうと、(3)の波線部に注目したことになると思うが、

伊尹の和歌において『古今集』『後撰集』の和歌がどのように摂取されているか、その摂取の実態を明らかにすることを試みる。

と言い、次のように結論する。

第一部（引用者注―私の言う「とよかげ」の部）、第二部

（引用者注―私の言う他撰部）を通して『古今集』の摂取が多いが、特に第一部は『古今集』を摂取した和歌が多く、第二部は『古今集』を摂取した和歌に加えて、『後撰集』を摂取した和歌が多い、という相違がみられることがわかる。

片桐・遠藤両氏の分析によると、1番歌のような歌は伊尹歌の主流を占めるものではなかったことになる。また、たとえ主流ではなくとも伊尹が1番歌のような歌を目指していた徴候が伺えるかというと、そうでもない。すると、はたして1番歌に伊尹が自信を感じていたのか、ますます疑問になってくるのである。と同時に、1番歌で伊尹の歌の力量を示そうとしたというⅠ段の意図も考え直さなくてはならなくなるのである。

そこで、1番歌が当時から名歌とされていたかどうか、また伊尹が自信を持っていたかどうかという問題より先に、1番歌が冒頭に据えられた意図から考え直したい。その為試みに、Ⅱ段以降の「とよかげ」の部各段冒頭部のとよかげの歌の技巧・趣向等を、片桐氏、遠藤氏が挙げたようなもの以外も含めてみてみようと思う。が、この際、未定稿と思われるB部[10]については省略し、A部に限定してみておく。

Ⅱ段

みやづかへする人にやありけん。とよかげ「もの いはむ」とて、「しもにこよひはあれ」といひおきてくらすほどに、あめいみじうふりければ、そのことしりたりける人の「うへになめり」といひければ、とよかげ

3　をやみせぬなみだのあめにあまぐものゝぼらばいとゞわびしかるべし

3番歌には掛詞、縁語などはないが、詞書に描かれている状況と併せると、「雨雲」を女に譬え、雨雲が上り雨が降るのと、女が「しも」ではなく「うへ」にいたままであって自分が涙を流すのを譬える趣向が見られる。なお、「なみだのあめ」は、『後撰集』巻十三・恋五・955番、「よしふるの朝臣」（小野好古）歌、及び同巻十九・離別・1326番、「宗于朝臣のむすめ」歌の用例が指摘されているが、他にも既に貫之が陽明文庫本『貫之集』782番に用例を残している。

（東宮かくれ給へるころよめる）
君まさぬ春の宮には桜花涙の雨にぬれつつぞふる

Ⅲ段

とよかげ、おほゐのみかどわたりなりけるひとにかよひける。ひとおほかりけるなかに、をとこの、いへのまへをつねにわたりて、ものもいはざりければ、女

8　くもゐにはわたるときけどゝぶかりのこゑきゝがたきあきにもあるかな

をとこ、かへし

9　くもゐにてこゑきゝがたきものならばたのむのかり

もちかくなきなむ

この段は女の歌から始まっているので、とよかげの返歌と併せて挙げた。まず女の歌の技巧は岩波新日本古典文学大系『平安私家集』[11]の指摘が分かり易いのでそのまま引くと、「空行く雁を前渡りする男に擬して恨んだもの。「雲ゐ」「渡る」「秋」は雁の縁語。「雲ゐ」は「宮中」を、「飛ぶ」は「訪ふ」を、「秋」は「厭き」を掛ける。」と言える。対して、とよかげの歌が『伊勢物語』十段を踏まえているのは早くから指摘のある通りである。

Ⅳ段

とよかげ、また、しのびてすみわたりける人に、

12　しのぶればくるしやなぞとはなすゝきいかなるのべにほにはいづらん

えあらはるまじくやありけん。

「花薄」「野辺」「穂に出づ」が縁語であり、「穂に出づ」には恋しい気持ちを表に出すことが譬えられている。

ところで、この歌は遠藤氏によると、『古今集』巻十一・恋一にある次の二首の語句を「組み合わせて利用したもの」とのことである。（傍線は遠藤氏の通り）

（題しらず）　（読人しらず）

519　忍ぶれば苦しきものを人しれず思ふてふ事誰にかたらむ

549　人めもる我かはあやな花すすきなどかほにいでてこひずしもあらむ

遠藤氏の言うところはこうである。（傍点原文）

上句「しのぶればくるし」は『万葉集』『後撰集』に用例がなく、『古今集』にはこの一例だけである。『古今集』の519番によった語句と考えられる。「はなすすき」「ほにはいづらん」は「花薄」の「穂に出づ」で恋する思いが表面に出る、という意味をもつ。「花薄」は『万葉集』にも一例あるが、このような意味では用いられていない。『古今集』には三例あるが[12]、その中の549番によっているとするのは、伊尹の和歌と語句の位置が一致し、和歌の構成が同じになっているからである。12「ほにはいづらん」549「こひずしもあらむ」と同じく推量の助動詞「む（ん）」で終わっているのである。それは上句「しのぶればくるし」を利用した『古今集』の519番も「誰にかたらん」と同様になっている。

Ⅴ段

ものゝえありて、このおきな、うちわたりなりける人に、ものいひけり。のべといひけるわらはつかひけるひとのもとに、ひるよりちぎりけれど、女はえしらで、たゞのべにのみあひてあるに

21　しる人もあらじにかへるくずのはのあきはてがたのゝべやしるらん

掛詞から指摘すると、「あらじ」と「嵐」、「帰る」と「返る」、「秋」と「厭き」、それに「野辺」と人名（通称）の「のべ」も掛詞になろう。縁語としては、「嵐」「返る」「葛の葉」「秋」「野辺」が挙げられる。また、「葛の葉」は男を譬えているが、そこには『平安私家集』の訳するように、「つれない嵐に翻弄される葛の葉のように、すごすごと帰る愛想づかしをされた私のこと」という意味が込められている。加えて下句には、「うちわたりなりける人」との仲が終焉に近づき、局にその人の姿も見えないという寂しい雰囲気と、荒涼とした晩秋の野辺の風景が重ねられている。

以上、Ⅱ～Ⅴ段の冒頭部の歌を見てみると、先に私に整理した片桐氏が指摘する特徴のうち、(1)と(3)の特徴を概ね備えていることなどが伺えたと思う。中には陳腐としか言いようのない技巧も含まれているが、このような技巧を凝らすことが、古今時代から受け継がれたこの時代の流行であったとは、同じく片桐氏の詳述するところである。(13)

翻って1番歌は、繰り返すが、特に何の技巧もない素直な詠み振りで、口語的な表現が目立つわけでも、詞書に支配されているわけでもない。相手が自分に対してつれないなどの条件さえ合っていれば、いつ詠まれてもよいような歌である。(14) ただ、遠藤氏によると、「みのいたづらに」が、『古今集』1063番(15)と「語句の位置は一致しないが、『古今集』によった可能性があるものとして」と言って挙げられている程度である。

では、このような1番歌が冒頭に据えられた意図は何かと言うと、従来から指摘のある通り、やはり2番歌後書部分にある草子地との関連で考えなくてはならないと思う。例えば、『一条摂政御集注釈』は次のように言う。（波線は引用者）

主人公の若き時代を賛美し、「いまやうのわかい人」の態度に不足を感ずるというこの情緒構造は、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という伊勢物語初段の発想や、「昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」という伊勢物語四十段の発想と軌を一にする。しかし、伊勢物語初段の昔人をほめる規準が、「いちはやきみやび」をした点にあったのに対し、こちらは、「上ずめく」態度などを捨てて、どこまでも相手をえようとする熱意と行動が賛美の規準になっている点に相違が認められる。伊勢物語四十段は、召使いという低い身分の女に思いをかけ、男は親に反対され、一旦恋死にをし、のち、親の願によって生きかえるという、伊勢物語の中では、珍らしく男より女の身分が下という話であるが、一旦は恋死にをする程の「すける物思ひ」をしたという点で、「あはれとも」の歌が、恋のために「みのいたづらに」なることをいう点も思いあわされ、見栄も命も捨てた恋という点で、発想上初段よりも一層この物語に近い。

特に波線部に注目したいのだが、このようなとよかげの姿勢が「賛美」されているとしたら[16]、1番歌に技巧等がないのも当然ではないか。とよかげは、「「上ずめく」態度などを捨てて」、「見栄も命も捨てた恋」の歌を贈ったのだから、技巧の盛り込まれた歌よりも素直な詠み振りの歌の方がここでは相応しいであろう[17]。そして忘れてならないのは、先程から1番歌の技巧のなさを強調してきたが、その為に1番歌が歌として全くなっていないかというとそうではなく、若者の情熱が素直に伝わるという意味では少なくともそれなりの歌にはなっている点である[18]。つまり、『拾遺抄』に採られたことなどをもちだすとすればここだと思うのであるが、後になって『拾遺抄』にも採られ、『八代集秀逸』でも評価された程の歌なのだから、当時高い評価が得られなかったとしても、率直な歌としては形を成しているとは言えよう。そんな歌によって女から初めて返歌を得られたことを描こうとするのがⅠ段の意図ではないだろうか[19]。

また、1番歌が詠まれたのは、実際伊尹のかなり若い頃のことではなかったかとも思えてくる。「とよかげ」の部にある八段に描かれている事柄のモデルとなった出来事が、Ⅰ～Ⅷの順序通りに起こった保証は全くない。それよりも、「とよかげ」の部の作為性を勘案すれば、順序も適当に入れ替えられている可能性の方が高いと言えよう。しかし、1番歌の技巧のない素直な詠み振りからすると、「わかゝりけるとき、女のもとにいひやりけることゞもをかきあつめ」（序文）た「とよかげ」の部の歌の中でも、最も若い頃に詠まれた歌とみられるのではないか。あるいは、今も指摘したように順序が入れ替えられているとすれば、最も若い頃に詠んだ歌として相応しい歌として1番に据えられたのかも知れない。いずれにせよ、とよかげの恋の始発を飾る歌として相応しいものと判断されたのであろう。それがⅢ段以降になると、当時の流行にのった歌をとよかげも創るようになってくるのである。

さて、問題を1番歌が伊尹の時代にも評価されたか、あるいは伊尹自身も自信をもっていた歌かという問題に移すと、以上の検討からすると、はっきり言って、そのようなことはもはや大きな問題ではなくなると思う。少なくとも「とよかげ」の部を読むにあたっては。1番歌は当時の流行にのった歌ではない。しかし、そんな詠み振りから作歌に慣れていないとよかげの若かりし頃の姿、「上ずめく」ことのない見栄も捨てた恋に邁進する姿が髣髴としてくるという点が確認できれば十分だと思う。そしてそのようなとよかげの姿を描くのがⅠ段の狙いだったのである[20]。

『注』

（1）Ⅰ～Ⅴ段には様々な趣向が凝らされているのに対し、Ⅵ～Ⅷ段からはほとんど趣向が読み取れないことから、前者と後者は成立を異にし、後者は未定稿ではないかと、拙稿(あ)で述べた。その際、前者をA部、後者をB部と名付けておいた。

(2)『一条摂政御集』からの引用は、孤本益田家旧蔵本により、私に句読点、濁点等を付したが、益田家旧蔵本につき筆者が実際に見たのは、一九三七年松かけ会発行の複製本の一九五八年再販本である。その際、益田家旧蔵本はかなり読みづらい字体であるので、『私家集大成』・『新編国歌大観』・平安文学輪読会著『一条摂政御集注釈』(一九六七年一一月・塙書房)等の翻刻を参考にした。なお、『一条摂政御集注釈』の見解にはたびたび言及するが、その際は注を付けない。

(3)古く、難波喜造氏が「一條摂政御集の成立に就いて」(『日本文学史研究』6・一九五〇年九月)で、

摂政太政大臣であつた伊尹をいかに物語化する為とはいえ口惜しき下衆に附托するということを、よしんば薨後でありいかに近親の者といえども先ず為し得まいということである。「をかしと思ひけることゞもありけれど、忘れなどして後に見ればことにもあらずぞありける。」「その折はいとをかしと思ひける事どもありけれど、ことなることなき人の上は皆忘れにけり」等の敍述も撰者が伊尹自身であると考える時一番無理なく納得出来ると思う。

と述べている。以来、難波説に対する反論は管見に入らない。

(4)『新版百人一首』(一九九九年一一月・角川書店)。

(5)『一条摂政御集』を除く歌集からの引用、歌番号は、『新編国歌大観』による。以下、同じ。

(6)例えば、菊地靖彦氏が『和歌文学大系19貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(一九九七年一二月・明治書院)「解説」で次のように述べている。(括弧内引用者補)

(「はるたつと……」歌が、『拾遺集』の)巻頭歌に位置されていることは注目に価する。『拾遺集』は『古今集』的表現のきらきらしさを削いで、情趣的に落ち着いた表現を求める傾向になる。そうした趨勢の中で忠岑的なものが、評価し直されていったらしい。幽玄を求める藤原公任は忠岑を高く評価し、『和歌九品』では『拾遺集』の巻頭歌を「上品の上」の例歌とする。

(7)「一条摂政御集について」(『国語国文』34巻12号・一九六五年一二月)。『一条摂政御集注釈』「解題」で再論。

(8)(2)と(3)に関連しては、「口語の使用、非歌語の使用は、会話を和歌ですること、すなわち、会話を「和歌らしく」することであるのだから、「和歌らしく」見せるために既成の歌語を一方で頻用することは矛盾ではなく、むしろ当然の現象なのである。」とも述べている。

(9)「『一条摂政御集』研究―藤原伊尹の和歌―」(北海道教育大学札幌分校国文学第二研究室『国文学研究叢書7和歌と説話文学篇Ⅱ』一九九一年五月)。遠藤氏の見解には後にも言及するが、すべて同論文により、その際は注を付けない。

(10) 注1参照。

(11) 犬養廉氏著、一九九四年一二月。『平安私家集』の見解には後にも言及するが、その際は注を付けない。

(12)「『古今集』には」は、「『古今集』恋部には」の誤りか。

(13) 注7及び、「後撰和歌集の本性」(『国語国文』25巻5号・一九五六年五月)、「後撰和歌集表現考」(『女子大国文』16・一九六四年一一月)参照。

(14)『拾遺抄』巻八・恋下・343番では、詠歌事情がやや違い、詞書が「ものいひ侍りけるをんなのちにつれなく成りてさらにあひ侍らざりければ」となっている。『拾遺抄』巻十五・恋五・950番の詞書も大同小異である。

(15) 巻十九・誹諧、「(題しらず)　よみ人しらず　なにをして身のいたづらにおいぬらむ年のおもはむ事ぞやさしき」。

(16) 拙稿(あ)では『一条摂政御集注釈』の驥尾に付して次のように述べている。

注目すべき点は二つある。その第一は、「としつきをへてかへりごとをせざりければ、「まけじ」とおもひていひける」という1番の詞書と、それに対応し、明らかに『伊勢物語』初段を意識している「はやうの人はかうやうにぞあるべき」云々という二番の詞書である。これらを合わせて考えるならば、とよかげの恋に対する情熱は相当にあついものであり、それは今の若者の比ではないということを、この段では強調せんとしているのだと思われる。

ちなみに本節では、「注目すべき点」の「第二」に訂正を加えているわけである。(冒頭の引用参照)

また、古く、丸岡誠一氏が「一条摂政御集成立私見」(『東洋大学文学論藻』11・一九五八年五月)で、伊尹には、「いまやうのわかい人に対立する「はやうの人」としての自己を主張し、「はやうの人」である自己を「とよかげ」に仮託しながら客観化し、形象化する意識があったと考えられる。これが「とよかげ」を編纂させた必然的要因の一ではないであろうか。伊尹にとって、「はやうの人」の自覚は、単なる字義通りではなく、好色者の振舞いをした青年期は、業平・元良親王(ママ)平中に至る好色者(すきもの)の伝統の継承ということに連なるものであったろうと思う。

と述べているのは示唆に富む。

(17) 難波喜造氏が「豊蔭の主題」(『日本文学』10巻10号・一九六一年一一月)で次のように述べているのも示唆に富む。

最初の一首は〈小倉百人一首〉に入っており、消え入らんばかりの切々たる慕情を歌った秀歌として、人口に膾炙しているが、この詞書で見ると、決して弱々しい心情の表白ではなく、「負けじと思ひて」女のもとに贈られたものであり、これこそ「上衆めきてやみなん」ものと対照的な「早うの人はかうやう

にぞあるべき」と誇らしげにのべられている下衆めいたふるまいにほかならないのである。

(1)の歌（引用者注―1番歌）では、詞書のいかんにかかわらず、歌そのものの示している心情は、弱々しい絶え入るようなかなしい慕情であることに違いはない。しかし、この詞書が示していることは、そのかなしい慕情がそのまま作者の気持のすべてではないということである。伊尹の心情のなかには、この歌を滲み出させたかなしいまでの愛情と、何くそと気負い立ち、相手をなびかせずにはおかぬ強い意欲とが併存していた事は認めざるをえない。その強烈な意欲があってこそ始めて、「からうじてこたみ」は得た返事に、みずからの下衆ぶりの成功を誇り、「早うの人はかうやうにぞありける。」と高らかに「今やうの若い人」にむかって宣しうるのである。

ともあれ冒頭のこの贈答は、伊尹が意識的に巻頭にすえて、下衆めいた精神を誇りかに謳歌したものと考えられるのであり、〈豊蔭〉（引用者注―私の言う「とよかげ」の部）の主題をもっとも端的に形象化したものといっても過言ではあるまい。

なお、難波氏は、1～7番を一章段（同一の女を相手とする）とみているが、従えない。

(18) 私はここで、大伴家持の残されている中で最も若い時の歌が左の歌であったことを思い起こすのである。

『万葉集』巻六・999番（旧番号994番）

大伴宿祢家持初月歌一首

ふりさけて　みかづきみれば　ひとめみし　ひとのまよびき　おもほゆるかも

(19)『百人一首』についても言えば、こういう物語性をも含めて定家に評価された結果が、『百人一首』採録になったと言えるのである。

(20) 敢えて当時の評価に拘れば、評価は低かったのではないか。それが先にも指摘したように、Ⅱ段以降では当時の評価にも値するような歌を詠むようになるのであるから、言わばⅠ段は、歌の出来映えを度外視し、あるいは逆手に取り、とよかげの最も若かりし頃の情熱を描いているのかも知れない。そういう意味において、Ⅰ段はⅡ段以降の序章的段になっているとも言えよう。

ところで、山口博氏は、『王朝歌壇の研究村上冷泉円融朝篇』（一九六七年一〇月・桜楓社）「歌人兼家と蜻蛉日記」で、道綱母以上に兼家の歌人としての力量に注目し、兼家の作歌能力は正しく時代の流行にのったもの、というより、それより一歩も二歩も抜きん出たものであったとみている。即ち、

宮廷サロンで多数の女性を相手にしてきた場なれの様である。適当にユーモアを含み、タイムリーに相手の意に叶う歌をよみ、女性を飽きさせない、しかも心をかきたてて引っぱってゆく、そのような洗練

された社交技術を兼家は備えており、そのような歌を作る。日常会話の歌の作者として、全く欠けた所のないすきまのない構えである。摂関家歌人として典型的人物といえるのである。

などと言う。そしてそんな「歌人兼家」が「物語のヒーローの座をわかんどほりから藤氏に奪った」のが『蜻蛉日記』上巻であると主張する。加えて、「とよかげ」の部、『蜻蛉日記』上巻、『本院侍従集』に関連して、

個別に把握するのは正しくないと思う。彼らの政治的地位といい、成立の時期といい、無関係である筈はない。彼らの意識に、物語のヒーローに自己を位置づける事による自己充足があったと考えられるのである。

と言う。さらに『蜻蛉日記』上巻の成立・流布は「とよかげ」の部に先行するとも考えている。とすれば、伊尹が『蜻蛉日記』上巻の兼家の歌人としての姿にまともに対抗しようとすれば、Ⅱ段以降の各段冒頭にあるような歌が詠めることを示す必要があったであろう。そんな中で、Ⅰ段をまた1番歌を冒頭においたのには、とよかげ、つまり伊尹には時代の流行にのった作歌能力以外にも若い頃には何よりも恋に対する情熱があった、そんなことを歌の出来を度外視して示そうとした意図があった、そんな序章的段がⅠ段であるとするとより面白い。

二　他撰部の北の方恵子女王関連の歌について

私は、他撰部にはもと歌語りあるいは歌物語的な歌群であったものが、あちらこちらに取り込まれていると考えている。拙稿(ぃ)ではそのようなものを取り上げ他撰部後半部の特徴及び成立を考えた。また、拙稿(う)では小野好古女関連の歌を取り上げた。本院侍従関連の歌群に関しては別稿を用意している。第二節以降では、今までに詳しく取り上げられなかった他撰部の歌語りあるいは歌物語的な歌群について考察を加えてみる。まずは伊尹の北の方恵子女王関連の歌群からである。

他撰部にある恵子関連の歌について、結論として、拙稿(う)の9・10頁あたりで次のように述べた。

他撰部中の数カ所に散在している恵子関連の歌は、もともとは他人詠等も利用しながら、伊尹と恵子の仲がよくない頃にテーマを絞って作られた歌語りで、それが他撰部に取り入れられるまでに切れ切れになってしまったと推察できる。そして、「おほんとの」などの特殊な言い回しを考慮すれば、もとの歌語りが作られたのは、恐らく恵子の周辺であったとみられる。

その際、紙幅の都合で論拠については要点しか述べることができなかった。本節では右に示した結論に至る論拠を詳述する。まずは、論述の都合上他撰部の恵子関連の歌をすべて引用しておく。

65　おほんとの、きたのかたきこえたまけるに、「御かへりなし」とて
つくまえのそこひもしらぬみくりをばあさきすぢにやおもひなすらん
そのほどのことゞもおぼかりけれどかゝず。
あひたまてのちに、やないしのもとこもりおはして、「うちに〈〈」とあるに、きたのかた

66　もゝしきはをのゝえくたす山なれやいりにし人のおとづれもせぬ
はやうのことなるべし。きたのかたとゑじたまて、「さらにこじ」とちかごとして、ものどもはらひなどして、ふつかばかりありて

101　わかれてはきのふけふこそへだてつれちよしもへたるこゝちのみする
御かへり

102　きのふとも今日ともしらずいまはとてわかれしほどの心まどひに
「かゝるをりにや」とて、しふにいりてありし。

103　ちかひてもなほおもふにはまけぬべしたがためをしきいのちならねば
また、きたのかたと「かぎりのたび」とておはしけるみちより

106　ゆくさきをおもふ心のゆゝしさにけふをかぎりといふにざりける
やだいにのいへにて、ひさしうおはせねば、うへ

170　ねざめするやどをばよきてほとゝぎすいかなるそらに（ママ）か きねなくらん
このおとゞ、きたのかたとゑじたまて、よかはにて、ほうしにならむとしたまふに、ほうしゝて、ゐどの

184　みをすてゝこゝろのひとりたづぬればおもはぬ山もおもひやるかな
おとゞ、かへし

185　たづねつゝかよふ心しふかゝらばしらぬ山ぢもあらじとぞおもふ
又、ゐどの

186　なよたけのよかはをかけていふからにわがゆくすゑのなこそをしけれ

まずは65、66番の二首を中心に見ていくが、65、66番は短いながらも歌物語的要素を含み持つと思うのである。その根拠を順次挙げていくと、最初に、65番詞書冒頭で伊尹を指す「おほんとの」という語が主語になっているのが注目される。

というのは、他撰部中で伊尹を指す語は圧倒的に「おとゞ」が多いのだが、その語は大概は「……、おとゞ」というように、詞書の最末尾で作歌者が伊尹であることを示しているだけか、あるいはたとえ詞書の最初にあっても、185番のように「かへし」がついているだけの簡単な形のものばかりだからである。従って、詞書等で伊尹の行為を表現する場合には必ずと言っていいほど主格が省略されているわけで、例えば63番詞書は次のごとくである。

よるものへおはしけるに、ものゝたまひけるをんなのまへをわたりたまけるほどに、火のきえたるに、「まつやある」とのたまうたれば、ありけるに、「うれしう」とのたまたるに、「いまよりはまつをこそ」ときこえたれば、おとゞ

これなどは、末尾に「おとゞ」という語がありはするものの、私に傍線を付した伊尹の動作を表している文節の主語はすべて省略されている。伊尹の私家集として当然のことだが、他撰部の詞書はこのようなものがほとんどで、65番のように伊尹を指す語が主語となっているのはあと一つ、やはり恵子関連の歌に含まれる184番詞書があるだけである。[21] つまり、伊尹の私家集として異例な65番のような書き方のなされている詞書は、他撰部では恵子関連の歌に限られているのである。

ところが男を指す語が主語になる例は物語的な「とよかげ」の部の詞書では随所に見られる。冒頭から目についたものを拾っていくだけでも、「みやづかへする人にやありけん。とよかげ「ものいはむ」とて」（3番）、「とよかげ、まだしきさまのふみをかきてやる」（6番）、「とよかげ、おほゐのみかどわたりなりけるひとにかよひける」（8番）、「とよかげ、こずやなりにけん」（11番）等、枚挙に遑がない。65番詞書は他撰部中にあって、「とよかげ」の部に似通っているとは言えないだろうか。

加えて、65番では伊尹を指す語が「おほんとの」であるのも看過できない。先にも触れたように他撰部中で伊尹を指す語は圧倒的に「おとゞ」が多く、例外はこの「おほんとの」と118番詞書の「をとこ」のみなのである。

次に65番後書（波線部）に注目したい。なぜこのような断り書きを入れるのだろうか。これに関して例えば『一条摂政御集注釈』は、「主語はこの集の編集者である。手もとにその歌があるのだが何らかの事情でこの中に含めないというのである。これは、この集が伊尹の歌すべてを集めたものではなく、ある程度精撰したという態度を示すものであろう。」と言う。しかしそれなら、当時の伊尹の歌はたいしたものでないものが多かったと「この集の編集者」が言っているのと同然であり、相手が北の方恵子女王だけに納得しかねる。また、もしそうだとしても、なぜ恵子関連の歌のここでだけこのように断られているのか疑問である。それ以外の伊尹の歌は皆出来の良いものばかりだと「この集の編集者」が判定したの

であろうか。

他にも阿部俊子氏[22]は、「あるひは恵子女王の生前、北の方の希望によつて省かれた歌があつたのではないかと想像することが出来る。宮北の方である以上、昔のことであつても伊尹と自分との交渉に関係のある歌の記載には関心があつたかと思はれる。」と述べている。他撰部前半部の編纂者が、恵子の意向を受けて載せなかった歌があることを断ったとみるのであろう。編纂者の判断ではなく、恵子の意向を受けたのなら、ここでだけこういう断りがあるのは理解できる。

しかし、恵子の意向で載せられなかったのなら気になる点が一つある。それは、他撰部にある恵子関連の歌が、つまり載せられた方の歌が、伊尹との仲が順調でない頃のものに限られている点である。即ち、「かぎりのたび」とか「ゐじたまて」とかいう状況にあったり、伊尹が好古女[23]の所に入り浸っている時の歌ばかりなのである。また、二人の間で贈答が成り立っているのが101 102番だけなのもそのことの表れと言えるだろう。そこで、65番後書が「そのほどのことゞも……かゝず」と言っている内容を考えてみると、65番や66番詞書から、二人が結婚に至るまでの時期の遣り取りであるとわかる。即ち、65番が伊尹がまだ恵子から返歌を得られない頃で、66番が結婚後だから、その間の遣り取りが載せられていないのである。換言すれば、伊尹が恵子に執心し、恵子が伊尹に靡いていく頃の歌が略されているのだ。

伊尹と恵子関連の歌について右に見たような取捨がなされている以上、65番後書が書かれた背景に公開を憚る恵子の配慮がはたらいたとみるのは、無理ではないか。載せられた歌と載せられなかった歌が逆なら分からないでもないが。もっとも、阿部氏も『一条摂政御集注釈』同様歌の出来不出来を基準に恵子の不掲載の希望がはたらいたと考えているのであろう。しかしそれでも、恵子は伊尹との仲が悪かった時の歌だけには満足していたことになり、やはり考え難いのではないか。

では65番後書は何を意味するのか。先に述べた65番詞書に見られる物語的な要素と併せ考えると、恵子との遣り取りに関しては、二人の仲が順調でなかった頃に絞って歌物語化が図られており、二人の蜜月時代の遣り取りを物語的省筆を装って省略したのが65番後書だと想定できると思うのである。事実このような断り書きは歌物語にはよくあるものである。ここから歌物語化の意図を汲み取るのは無理であろうか。よって、65番後書は他撰部前半部の編纂者によって齎されたものではなく、65、66番がもと歌物語としてあり、その段階から存在していたと考えるのである。

もと歌物語であったということに関連しては、二首ともに異伝を持つのも注目される。しかも、65番の異伝は他撰部138番にある重複歌であり、66番の異伝は伊尹が撰和歌所別当を勤めた『後撰集』にあるものなので、単なる間違いと言いきってしまうのは躊躇される。とりあえず、それらを示しておく。

ひさしうおはせで、おとゞ

138　つくまえのそこひもしらぬふちなれどあさましきに
　　やおもひなすらん

『後撰集』巻十一・恋三・717番

内にまゐりてひさしうおとせざりけるをとこに
　　をんな

ももしきはをののえくたす山なれや入りにし人のおとづ
れもせぬ

前者の重複は、同じ歌を伊尹が別の機会、別の女に用いた結果とも考えられるが、特に問題なのは作者名表記の所に「をんな」とある後者で、『一条摂政御集注釈』は次のように説明している。

後撰集の撰者には、勿論この歌が撰和歌所の別当である伊尹の北の方の歌だとわかっていたであろう。それを「をんな」としてのせたことについては、さまざまの理由が推測されるが、もっとも考えられるのは、恋の部に入っている歌でもあり、特定の個人の歌を一般化し、物語化したものと解することであろう。

が、この考え方には疑問がある。というのは、『後撰集』での詞書によると「をとこ」は実際に宮中に行っていたことになる。翻って66番の場合は、伊尹は好古女の所に籠もっていて宮中にいると嘘を吐き、恵子もそれを承知の上で歌を贈っているらしく受け取れる。66番の場合恵子の歌は非常に皮肉なものになり、話としても『後撰集』の場合よりこちらの方が面白かろう。従って、もし『後撰集』に『一条摂政御集注釈』の言うような物語化の意図があったならば、男が実際に宮中に行っていた状況にわざわざ変えたりはしないと思われる。『後撰集』恋の部には作者名を明らかにしている歌もたくさんあり、この歌の作者をことさら「をんな」として物語化を図ったことを認める積極的な理由を見い出せないことと併せて疑問である。

やはりこれは、『後撰集』の「をんな」の歌を恵子の歌に仕立てたという逆の場合の方が可能性が高いと思う。なぜなら(21)、『後撰集』の次の718番歌は「これまさの朝臣」の歌であって、かつ「とよかげ」の部（35番）にもある歌である。『後撰集』の伊尹の歌（718番）の直前の何者とも知れない女の歌（717番）をもとに、伊尹と恵子をめぐる歌物語が創作されたというのはおおいにあり得ることだと考えるからである。

そうすると、65番についても、138番を利用した可能性も出てくると思う。

。詞書・後書の特異さと二首ともに異伝を持つことを併せて、この二首には物語的虚構化の跡が窺えるのである。しかも、「おとゞ」ではなく「おほんとの」という特殊な語が使われていることからして、物語的虚構化が図られたのは、恵子の側ではなかったろうかとも思うのである。

次に101～103番を取り上げる。101～103番での問題は103番詞書である。これによると、103番歌のもとの資料（「しふ」）での詞書は「かゝるをりにや」であったと分かる。それがこのように注記されているのは、103番歌は『後撰集』巻十二・恋四・886番に次のようにして採られており、伊尹とも恵子とも関連がないものらしいからである。

よしふるの朝臣に、さらにあはじとちかごとをして、又のあしたにつかはしける　　蔵内侍

ちかひても猶思ふにはまけにけりたがためをしきいのちならねば

ではなぜ103番歌がもとの資料にあったのか。このことについて、阿部俊子氏[25]が次のように述べている。

これはあるひはこの部分の歌からも、何か歌物語的なものをまとめたいと思つて他人の歌を自分の集にかきとめておいたのであらうかと一応は疑つてみることも出来るが、この場合はむしろさうではなく「ちかごと」を破つてもやはりあひたくてやりきれないといふはげしい気持がうごくといふ心境をよんだ歌が、知人の作品の中にもあつたといふので伊尹自身書きとめておいたと素直に見ておいていいであらう。

私は「伊尹自身」が「自分の集に」であるかどうかはわからないが、阿部氏が一応疑っている方の可能性も捨てきれないと考える。それは、先ほど見た65、66番の恵子関連の二首では歌物語化の意図がみられ、しかも、そのうちの一首は他人詠を恵子の作に仕立てたと思えるからである。また、101102番では、もう会わないという誓いを破ったのが伊尹であるのに対し、好古と蔵内侍の話では、女の蔵内侍が誓いを破っている。ここでも、66番同様に他人詠をも利用し、恵子と伊尹とが仲違いした頃の物語を創ろうとして、蔵内侍の歌を書きとどめていたかも知れないと思うのである。[26]

次に170番について一点だけ指摘しておく。それは、170番が恵子の単独歌になっている点である。[27]伊尹の私家集中に伊尹の歌を欠いて恵子の歌だけが載せられているのはやや解せない。もとあった伊尹の返歌などが落ちてしまったとも考えられるが、これは、もとは恵子の所で纏められていた歌物語資料の断片だとは考えられないだろうか。もしそうなら、恵子の歌が単独であっても不思議はない。

なお、女の歌だけが単独で載せられていると考えられるものとしては、107番の好古女の歌がある。170番も伊尹が好古女の所に入り浸っている時に詠まれたもので、好古邸に届けられた可能性もあるので、好古家と他撰部との関連[28]で考えるべきかも知れない。

恵子関連の最後として184～186番を取り上げる。184～186番には恵子の歌は直接出てこないが、やはり恵子との仲がうまくいかない頃の話であり、恵子の側で纏められていた節が伺える。しかしこの三首に関しては、拙稿(ハ)の9頁あたりで詳述

しているので、ここでは一点だけ繰り返しておきたい。

それは、184番詞書の冒頭で「このおとゞ」と「おとゞ」に「この」が掛かっている点である。このような例は他撰部の他の詞書には例がなく、[29]『平仲物語』の多くの段の冒頭が「この男」で始まっていたり、「とよかげ」の部のV段、Ⅷ段の冒頭がそれぞれ、「ものゝえありて、このおきな」、「このおきな」で始まっていたりするのに似ている。つまりは、歌語り・歌物語の形式に近いとも言えるのである。しかも、184番の直前の183番は、

たちたまて、りんじのまつりに、「しらぬくるまか」とて、ゆきのふるに、うちよりたまて、「これはらひたまへ」とあれば、いとゝくきこゆる。

183　なにゝてかうちもはらはむきみこふとなみだにそでは　くちにしものを

となっていて、女の歌一首で伊尹の返歌もない。それに「このおとゞ」と続いてくるのは不自然である。

従って、183番からは、もとは伊尹を「おとゞ」と呼んで「このおとゞ……」という形で話をつないでいく歌物語の一節が切り取られて、他撰部のここに取り込まれたものと考えられるのである。

そうすると、繰り返しになるが、恵子関連の歌は、特に取り立てて言及しなかった106番も含めて、恵子と伊尹の仲がうまくいっていなかった頃の歌であり、中には「おほんとの」という特殊な言葉もあることからすると、他撰部にある恵子関連の歌の全部乃至はほとんどは、もと恵子の側で創られていた歌物語が切れ切れになって、他撰部に取り込まれたという可能性が見えてくると思うのである。[30]

『注』

(21) 119番の後書部分が「このおとゞはいみじきいろこのみにて」で始まっていて、「おとゞ」が主語になっているわけではないが、それとよく似た様相を示している。しかし119番の後書部分は他撰部前半部の最末尾にある跋文に相当する文で、普通の詞書や後書と同列に扱うわけにはいかない。

(22)『歌物語とその周辺』(一九六九年七月・風間書房)。

(23) 66番詞書の「やないし」とは小野好古女の「野内侍」のこと。また、170番詞書の「やだいに」とは好古を官職の太宰大弐で呼んだもの。

(24)『後撰集』巻十一・恋三・718番。

女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて　これまさの朝臣

すずか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん

(25) 注22に同じ。

(26) 103番と『後撰集』886番の問題については、「しふ」が『後撰集』を指すという前提のもと、鈴木棠三氏が「一條攝政御集の研究」(『文学』3巻6号・一九三五年六月)で考えを述べているが、「しふ」が『後撰集』を指すというのには従えない。難波喜造氏注3論文、及び『一条摂政御集注釈』「解題」参照。

(27) この件は拙稿(う)では取り上げなかった。

(28) 103番が好古に贈られた歌であったと思われる件及び107番の問題も含め、他撰部と好古家の関係については、拙稿(う)で詳述した。

(29) 同様の例が119番の後書部分にあるが、注21参照。

(30) 片桐洋一氏は注7論文において、170番詞書で恵子が「うへ」と呼ばれていることに関して、「「北の方」と呼ぶのはまだよいが「うへ」(170)という呼称なども気になる。編纂者が恵子女王方の女房であることを示しているような気が私にはするのである。」と述べている。なお、片桐氏が「編纂者」というのは、私に言う他撰部全体の編纂者であるが、私は、恵子関連の歌を纏めた女房などによる呼称がそのまま写されたものと考えたい。

三　他撰部の69～80番(「とばりあげのきみ」との贈答歌群)

(i)

69　とばりあげのきみに
たとふればつゆもひさしきよのなかにいとかくものをおもはずもがな

又(31)　返

70　あくるまもひさしてふなるつゆのよにかりの心もしらじとぞ思ふ

(ii)

71　ながつきのつごもりに、「つきたてゝ」とおぼしきにや、おとゞ
ふきはつるあきのあらしもかなしくてさすがにあすのまたるゝやなぞ

72　かへし
かぎりとてながむるそらにこがらしのかぜふきはつるあすやまたるゝ

(iii)

73　「おはせん」とてのよ、さもあらねば、つとめて、おとゞ
ちぎりてしこよひすぐせるわれならでなどきえかへるけさのあわゆき

74　かへし、おなじ人
ふるゆきはとけずやこほるさむければつまきこるよといひてしものを

(iv)

75 ありしところならで、かへりて、女
とぶとりのこゑもきこえぬおく山にいりてぞものはおもひましける[32]

76 かへし、おとゞ
いかでかはとはざりつらんほかになくこゑをしどりのつばさぬけずは

(v)

77 むつきに、あめかぜいたうふくに、おなじ女
はるかぜのふくにもまさるなみだかなわがみなかみもこほりとくらし

78 かへし
みなかみのこほりならねどゝしふればわがみづからもうちとけにけり

(vi)

79 おなじをんな、ことをりに
ときはなるおもふ心のことのはをまつにつけてもみつる今日かな

80 おとゞ
いひそめしわがことのはにくらぶればしたもみぢするまつはものかは

この十二首は二首ずつの六組の贈答でできている。以下論述の便宜上69 70番の贈答からそれぞれを順に(i)〜(vi)と名付けておく。また、74番詞書の「おなじ人」、77番詞書の「おなじ女」、79番詞書の「おなじをんな」をもとに(i)〜(vi)の相手の女を考えてみると、(ii)と(iii)及び(iv)と(v)と(vi)がそれぞれ同一であると言える。相手の女も便宜上、(i)の相手をA（＝「とばりあげのきみ」）、(ii)。(iii)の相手をB、(iv)〜(vi)の相手をCとしておく。すると、ABCすべてが別人の場合、A≠B≠Cの場合、A≠B＝Cの場合、A＝B≠Cの場合が考えられると思う。A＝C≠Bの場合も可能性は低かろうがあり得なくはない。このうちどれが真相なのかから考えておかなくてはならない。

まず、作歌がなされた時期が一番分かり易いのでそれからおさえておくと、(i)〜(vi)の贈答はきれいに季節の推移に従って配されているのに気づく。それぞれの贈答がなされた季節とそれが判断できる語句（傍線部）、それに相手の女を併せて次頁の表二に示しておく。

これだけをみるとA＝B＝Cで、「とばりあげのきみ」との遣り取りを季節の推移通りに並べた結果のようにも思える。はたしてその通りかどうか検証していく為、A相手の贈答から内容を確認しておく。

A相手の(i)では男の伊尹の方から「いとかくものをおもはずもがな」などと思いを訴えかけ（69番）、女のAはそれに対し「かりの心もしらじとぞ思ふ」と拒絶的な歌を返す（70番）という典型的な恋の初発段階での遣り取りのようである。

続くB相手の(ii)と(iii)では、ともに何らかの事情でBの所には行かなかった時に伊尹から詠みかけた贈答となっている。即ち、(ii)では71番詞書などから、九月末に伊尹が翌月になってからの訪問を約しているのが分かるので[33]、その九月末の

表二〈69～80番の配列〉

歌番号	贈答	女	季節	季節を判断できる語句
69・70	(i)	A	秋	両歌に「つゆ」
71・72	(ii)	B	秋の末	71番詞書に「ながつきのつごもり」
73・74	(iii)	B	冬	73番歌に「あわゆき」、74番歌に「ふるゆき」
75・76	(iv)	C	冬	76番歌に「をしどり」
77・78	(v)	C	正月初め	77番詞書に「むつき」、77番歌に「はるかぜのふく」、「こほりとくらし」
79・80	(vi)	C	正月子日	79番歌に「まつにつけても」、80番歌に「まつ」

夜は訪れなかったのである。(iii)では73番詞書から、伊尹が訪問の約束を破ったのがはっきりわかる。

C相手の(iv)～(vi)に移る。(iv)では、Cの歌（75番）の詞書と「おく山にいりてぞ」から、Cは75番歌を贈る前に奥山に行っていたのがわかる。それに答えた伊尹の歌の「とはざりつらん」（76番）は「飛ばざりつらん」と「訪はざりつらん」の掛詞なので、伊尹は自分を鶯鳶にみなして「翼が抜けてしまわない限り、あなたの所を訪問しないというようなことはなかった」と言っていることになる。つまり、奥山に行っていたCを伊尹は訪れなかったのである。(v)でも、まずCの方から「はるかぜのふくにもまさるなみだかな」（77番）と訴えている。[3,4] それに対し伊尹が「としふればわがみづからもうちとけにけり」（78番）と答えている。何年間もCには打ち解けていなかった、心を許していなかった伊尹が、Cから恋情を訴えられ、(v)で始めてCに対して本当に愛着を感じるようになったのではないか。このことは最後の(vi)からも窺える。79番詞書は具体的状況を全く説明しないが、79番歌より、『一条摂政御集注釈』が「この歌を女が詠む前に、子の日の小松に男の歌がつけられて来たのであろう。」と言うような状況が想定できる。そして、その伊尹の歌は「松のようにいつまでもお変りないあなたのお心のこもったお歌」（『一条摂政御集注釈』の79番歌の口語訳より）であったと想定できる。その心の不変を訴えたのが80番の伊尹の歌である。

C相手には(iv)～(vi)の三組の贈答があり、やや長いので纏めておくと、二人のうちCの方からまず懸想し、(iv)では冷たかった伊尹が、(v)で心を傾けるようになり、ついに(vi)で愛の不変を言うようになるという経緯が想像されるのである。男から懸想しかけるのが普通であった当時の恋愛からすると、変わった経過を踏んでいると言えよう。

以上三人の女のうち、誰と誰が同一人物で、誰と誰が別人

だと分かるだろうか。まず、AとCは別人だと言える。というのは、典型的な恋の初発段階での遣り取りとなっている(i)と女の方から懸想しかけたと思われる(iv)〜(vi)をみるに、A＝Cというのは矛盾すると思われるからである。

次にAとBであるが、これについては何とも言えないのではないか。(i)と(ii)の間にあった新枕等がとばされているとみればA＝Bだと思えるし、また、(i)と(ii)(iii)はそれぞれ別人の遣り取りであってもおかしくはない。

残ったBとCはどうか。BとCとが同一かどうかは非常に微妙だと実は思っているのだが、『一条摂政御集注釈』の見解を参考にして考えたい。『一条摂政御集注釈』はBが詠んだ74番の下の句の「つまきこる」について、「女にあれこれ奉仕的にしてやるといっていたように感じられる」とも、「世を捨て隠棲するニュアンスを含んでもいるようである」とも言い、74番歌に対して二通りの解釈を示している。

まず口語訳の欄に示された解釈（これが『一条摂政御集注釈』の結論となろう）は次の通りである。

降る雪は解けずに氷るものでしょうか、解けてから氷るものです。あなたは泡雪が消えるとおっしゃいますが、単に消えるだけじゃなくて氷る程の寒さです。今夜は寒いので、行って薪をきってやるよと、おっしゃっていらっしゃったのに。

こうとると、(iv)の75番の前でCが奥山に行っていたのは、(iii)の伊尹の態度に拗ねてしまって奥山に行ったともみられるし、特に両者に繋がりはないともみられる。前者ととれば当然B＝Cだが、後者ならB＝CともB≠Cとも考えられる。また、(ii)(iii)と(iv)を比べてみると、如何なる事情にせよBの所に行かなかった(ii)(iii)と、伊尹が奥山に行ったCを訪問しないままで交わされた(iv)とでは、伊尹の冷たさは通底するようだ。でも、男からBに歌を詠みかけている(ii)(iii)と、奥山から戻ってCから歌を贈らなければならなかった(iv)との差は大きいとも思う。結局結論は出しにくい。

では、「つまきこる」に「世を捨て隠棲するニュアンス」を読み取ればどうなるか。『一条摂政御集注釈』は75番歌に関して次のように言っている。

七五番の歌の作者は、七四番の作者と同一人物らしい。もしそうであるなら、七四番の歌における「つまきこる」は、隠棲する意を含んでいるものとして理解すべきものと思われる。この歌をよむことによって、前の歌の理解に限定を加えることになるのである。

このように、『一条摂政御集注釈』はB＝Cの可能性を示しているのだが、実は、『一条摂政御集注釈』の見解を総合的に判断すると、右の見解には否定的にならざるを得ないのである。

というのは、『一条摂政御集注釈』は、「つまきこる」が「世を捨て隠棲するニュアンスを含んで」いる場合の訳を、語釈欄で次のように示している。（傍線は引用者）

あなたのおこしがなくなり、あなたと私との間は、寒い仲となりましたので、常々私はもう山里に隠れようと言

っておりましたのに、又々約束をたがえておこし下さらなかったのですから、いよいよ山里に身をかくすより他なくなりました。

右の訳に従うとBは74番で奥山入りすることを宣言していることになる（傍線部）。ところが、76番の口語訳の末尾に「いってくれたら一緒に行ったのに」を『一条摂政御集注釈』はつけ加えている。前述の通り、男は奥山のCを訪問しなかったのだが、Cが自分には告げずに奥山に行ったことをその口実としているとみているのだ。[35] 確かに、初句にある「いかでかは」などという言い回しも含めてもう一度76番歌の意味を考えると、「鴛鴦の翼が抜けてしまう、そんなおよそ考えられないことがない限り自分はあなたを訪問したのに」と強調せんとしていると受け取れる。なのに伊尹は訪問しなかった。すると、その口実としては、Cから告げられなかったのでCが山に行ったことを知らなかったというのが相応しいように思える。ならば、Bが奥山入りを宣言していた74番と矛盾を来す。この矛盾はB＝Cとみる、即ち、74番の「つまきこる」に「世を捨て隠棲するニュアンス」を読み取ることに由来しているとみざるを得ない。『一条摂政御集注釈』のように「つまきこる」に隠棲のニュアンスを読み取ってB＝Cとみるのは、事実としては否定されるのである。（その為であろうか、『一条摂政御集注釈』の口語訳欄では先に引用した訳が掲げられている。）

結局、AとCは別人で、AとB、BとCについては何とも言えないということになってしまう。すると、最初にABCと名付けた所で指摘したように、(i)～(vi)の贈答では、贈答相手の女が前と同一であることを示している所と、示していない所があるので、示している所だけが同一で、他は別人との贈答に変わっているとみるのが最も素直であろうか。要するに、ABCは皆別人とみるのである。そうみると、AとCだけは別人だと思われるという先の考証とも無論矛盾しない。

ところが今度は、これも最初の方で述べたが、(i)～(vi)が季節の推移通りに並べられているのは、単に季節に拘っただけの結果なのか、という疑問が出てはこないであろうか。そこで私はもう一度、先程のB＝Cとみる『一条摂政御集注釈』の見解に戻りたいのである。つまり、『一条摂政御集注釈』が示す一案のように、B＝Cと読むのは誤りかというと、必ずしもそうではないと思う。(i)～(vi)が季節の推移通りに並べられ、BとCが「つまきこる」と「おくやまにいりて」で同一人物のようにもみえるのが、偶然あるいは無意識のうちに起こったとは考え難いのである。(iv)まで読み進め「(iii)の『つまきこる』は隠棲のことを言っていたのか」と読者に思わせる（『一条摂政御集注釈』の言う「前の歌の理解に限定を加える」）意図が(i)～(vi)を配列した人物にはあったに違いないと思うのである。

それに関して、『一条摂政御集注釈』が「つまきこる」について「世を捨て隠棲するニュアンスを含んでもいるようである」とも言う時、『後撰集』巻十五・雑一・1083番（『伊勢物語』

五十九段などにも）を参考歌として挙げているのには注目される。

世中を思ひうじて侍りけるころ　　業平朝臣
すみわびぬ今は限と山ざとにつまぎこるべきやどもとめてむ

読者にこの歌を思い浮かばせて「つまきこる」に隠棲のニュアンスを読み取らせ、B＝Cと思わせる意図があったとみるのは考えすぎであろうか。(36)

結局私の考えを纏めるとこうである。B≠Cであったならば元来別人との贈答であった(ⅲ)と(ⅵ)を並べることによって、あるいは、B＝Cであったならば必ずしも繋がりがあるとも思えない(ⅲ)と(ⅵ)を並べることによって、同一人物との繋がりのある贈答のように見せかけると言うか思わせる意図が、これらの歌を配列した人にはあったと考えたいのである。

そうすると、76番での伊尹の口実を先の『一条摂政御集注釈』のように解するのはおかしくなるのだが、『平安私家集』が76番結句に「のっぴきならぬ所用を寓するか。」と注しているようにとればよいのではないか。(37)

今はBとCについてだけ述べたが、この配列に対する意図は当然Aも含めてであり、A≠Bならばそこでも別人を同一人物のように仕立てる虚構が施されていることになる。いずれにせよ、AとCを同一人物に見せかける意図だけは伺えるのである。このように配列に意を用いて全体として物語的な展開になるように仕組まれていると考えるのである。(38)

さて、(ⅰ)～(ⅵ)の贈答の相手を一人に仕立てているとすると、当然(ⅰ)で名前が出ている「とばりあげのきみ」がその人になる。他撰部後半部㊦にも一度出てくる（167番）「とばりあげのきみ」は、伊尹にとってよほど重要な恋人であったのであろうか。

【注】

(31) この「又」は異様である。「又」の上にある「勅」という集付けとともに、『一条摂政御集注釈』の説明が詳しいので引用しておく。

墨色薄く、次の「返」の字とは別筆。どういう意味なのか解らない。あるいは、「又」ではなく、何かの符号かもしれない。なお、この「又」とおぼしき字の上に、底本では、「勅」という集付けがある。底本の中で行われている他の集付けと場所が異なり、六九番の歌と七〇番の歌の中間に書かれている。一〇一番と一〇二番の場合も同じ書き方である。この例からすると、この集付けは、六九番と七〇番と両方の歌に対する集付けかと考えられる。

(32) 益田家旧蔵本では75番歌のあと一面空白で、「片表」という文字が書かれ、押印が二つある小紙片がそこに張られているが、本文の欠脱はないものと思われる。

(33) 『平安私家集』は71番詞書「「つきたてゝ」とおぼしきにや」を「女は月を越してから、ともかくも、とのつも

りだったのだろうか、の意。」としている。「つきたつ」という動詞は珍しく、解釈も難しいが、「月立つ」とは、新しい月になることで、「つきたて」は、「つきたつ」の「たつ」を下二段活用にすることによって、自分の意志を入れたものと考えられる。何かの事情で、九月中、男は女の所へ行けなかったので、明日は行くぞとつげる歌をやったものであろう。」と言う『一条摂政御集注釈』の想定に従いたい。

(34) 77番は『新古今集』巻十一・恋一・1020番に「謙徳公」の歌として採られている。しかし、歌の内容からは女の歌とみられる。『一条摂政御集注釈』も『平安私家集』も女の歌ととっている。久保田淳氏著『新古今和歌集全評釈第五巻』(一九七七年四月・講談社)も『一条摂政御集注釈』の見解を引用して、「家集の読みとして、それが正しいであろう。(略)女歌らしい口吻は感じられる。そして、返歌の「わがみづからもうちとけにけり」という鷹揚な歌いぶりがいかにも「おとゞ」らしいと思われる。」と述べている。

(35)『一条摂政御集注釈』の訳だと奥山に同行しなかった口実を述べているようだが、「とはざりつらん」とあるのだから訪問しなかった口実とすべきだろう。

(36) 一方で『一条摂政御集注釈』は、「女にあれこれ奉仕的にしてやるといっていたように感じられる」場合の参考歌として、『拾遺集』巻二十・哀傷・1346番を挙げる。

大僧正行基よみたまひける
法華経をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし

こちらも有名な歌なので、こちらを思い浮かべる人も多いであろう。

(37)『平安私家集』もB＝Cだと考えている。ただし、先に述べた初句「いかでかは」などという言い回しからすると、「のっぴきならぬ所用」などを口実にするのは弱いような感じがする。いずれにせよ、実際はB≠Cなのに、または、(ii)と(iii)には直接の繋がりはないのに、繋がりがあるように配列されているとすれば、それに合わせて読めばどこかに無理が生じるのはむしろ当然であろう。

(38) この六組十二首の贈答歌の詞書には、他の歌群で指摘したような特徴は見られない。後書はそのものがない。この贈答歌群のみが配列だけによって物語化が図られたとみるのは強引なような気もするが、可能性の一つとして示しておいた。「とよかげ」の部の中で、Ⅲ段の詞書にほとんど特徴がなかった(8番詞書が二つの文でできている程度)のが思い起こされる。「とよかげ」の部のⅢ段に関しては、拙稿(あ)22頁で論じた。

四　他撰部の「東宮にさぶらひける人」との贈答歌群（81～95番）

東宮にさぶらひける人をおぼしかけて、いりたちたまへれば、みかはせど、さすがにこゝろのまゝならで、ゝならひしゐたるところにおはして、ものにかきたまふ。

81 つらけれどうらみむとはたおもほえずなほゆくさきをたのむ心に

かたわらに、をんな

82 あめこそはたのまばもらめたのまずはおもはぬ人とみてをやみなん

とみて、たちておはして、ようさりもておはしたる。

83 おほかたのあめをばいはじおもふにはみづだにもらぬものとこそきけ

かへし

84 もれずともえぞしりがたみふるあめのハみかさの山もさしはなちつゝ

このひとのつぼねに、かうぶりのはこをやどして、とりにたまへるはこのうへにかく。

85 ふかゝらぬ心ときみをみつのえのはこをおきてもなにゝかはせん

かへしはなくて、ようさりおはしたりけり。

さとにいでたるに、りむじのまつりのかざしのはなにさして

86 きみゝよとさしゝかざしはちりもせずうつろひもせずのどけからなん

かへし、さわがしくてえきかず。

ひさしうて、女

87 まつよりもひさしくとはずなりぬるはおもふといひて心がはりか

「こゝろよりほかにもちかはせたましか」などあれば

88 神かけてまたもちかへといひつべしおもひおもはずきかまほしさに

いかゞありけん、つとめて

89 いであやしけさしもそでのぬるゝかなゝにをしるしの心なるらん

かへし

90 しるしなくぬるらんそでをかはしつゝおもふにひつるわれもはかなし

しはすのせちぶのつとめて、かぜのあらければ、おとゞ

91 そらみゝかけさふくかぜのおときけばわれおもはるゝこゑのするかな

かへし

92 はるかぜかみづむすびつるふゆのひにうちとけがた

きうぐひすのねか
　つごもりにまかでぬ。正月二日、おとゞ
93　きのふよりまてどおとせぬうぐひすのこゑよりさきにわれぞなきぬる
　ふるとしの御仏名に、女
94　つらさをもみでやみぬべしつくりこしこひのつみにてこよひきえなん
　返し
95　こひしさをつみにてきゆるものならばみをなきものになしつゝやみん

81番以下は81番詞書にある「東宮にさぶらひける人」との話である。彼女との遣り取りが終わるのは、次に女の名前が「まちじりのきみ」と明示されている96番の前までのどこかであるはずだが、判然とはしない。しかし、81番から順次見ていくと、83 84番の贈答は83番詞書が「とみて、たちておはして、……」となっているから81 82番の贈答の続きで、次の85番詞書の冒頭が「このひとのつぼね」になっているから、少なくともここまでは「東宮にさぶらひける人」との話であるのは間違いない。一方、86番以下の女は「東宮にさぶらひける人」だと断言はできない。だが、86番詞書の冒頭が「さとにいでたるに」となっているので、出仕先である東宮のもとから里に戻った時の歌と思える。また、93番詞書にも「つごもりにまかでぬ」とあり、続く94 95番の贈答は宮中行事「御仏名」の際のものである。従って、95番まですべて「東宮にさぶらひける人」との贈答だととっても無理はない。あるいは、前節で見た69番以下のように、複数の女との遣り取りを一人との贈答のようにみせかけているのかも知れない。

以上のように、この歌群は実際に一人との贈答かどうかは断定できないのだが、何らかの構成意図が窺えないだろうか。そう考えてこれらの歌の配列を見てみると、特定の語を軸にして歌が配されている様が伺えるのである。

まず、81番詞書にある「みかはせど」（実線部）に注目したい。この語句を『一条摂政御集注釈』は「目と目があったのだが」と訳すが、それだけでは足りない。二人は思いを寄せ合って見つめ合っているのである。なぜなら、81番以下の二組の贈答を見ていくと、81番歌に「恨みむ」との掛詞の「みむ」、82番歌に「漏らめ」との掛詞の「もら」[39]と「みて」、83番歌に「水」との掛詞の「みつ」、84番歌に「漏れず」との掛詞の「もれ」というように、ことごとく見る・見守るという動作を表す言葉が出てくる。二人は互いを「みかは」したことを契機に四首の歌を遣り取りしているのがわかる。従って、この場合の「みかは」すと言うのは単に「目と目があった」、あるいは互いの姿を目にしたというようなことにとどまらず、二人が思いを掛け合って見つめ合っていることを言っているに違いない。だからこそ歌を詠む切っ掛けになり得るのである。

ところで、歌の内容からは一見女は伊尹を思っていないよ

うに思える。即ち伊尹は81番歌で「つらけれどうらみむとはたおもほえず」と訴えなければならず、84番歌で女から「みかさの山もさしはなちつゝ」と言われている。このように女がつれなくするのはどうしてであろうか。それは、二人の立場によるのだと思う。そこで、81 82番の贈答を載せる『新古今集』巻十一・恋一・1038 1039番を見てみたい。

冷泉院みこの宮と申しける時、さぶらひける女房を見かはして、いひわたり侍りけるころ、てならひしけるところにまかりて、ものにかきつけ侍りける　謙徳公

1038　つらけれどうらみむとはたおもほえず猶ゆくさきをたのむ心に

返し　読人しらず

1039　あめこそはたのまばもらめたのまずはおもはぬ人とみてをやみなん

これによると東宮は後の冷泉院（憲平親王）になるが、伊尹は憲平親王が皇太子当時九五六（天暦十）年三月二四日から東宮権亮を勤めており、[41]この贈答はその頃のものとみて間違いなかろう。よって、二人は東宮権亮と東宮に仕える女房であったわけだ。そんな二人の立場を女が憚って、伊尹に思いを寄せ見つめ合いはするものの、契りを結ぶのは許さなかったのであろう。しかし当然伊尹は契りを迫ってくる。以上のような事情がこの二組の贈答の背景にあると思える。

このような事情を81番詞書にある「みかはせど、さすがにこゝろのまゝならで」が表している。つまりこの一節は、「見つめ合いはするけれども二人は共に東宮に仕える身なので、思うように愛し合うことはできずに」という事情を言っているのである。[42]

続く85番詞書は「このひとのつぼねに、かうぶりのはこをやどして」云々となっている。女の局に物を置いておくぐらいだから、二人は既に逢瀬を重ねているのであろう。ではなぜ新枕の場面など、それまでの経緯は描かれなかったのであろうか。それは、86番迄は先ほど指摘した「みる」の連想で歌が配されているからだと思う。即ち、85番歌には「水」との掛詞の「みつ」があり、86番歌には「きみゝよ」がある。つまり81～86番までは「みかはす」という動作を契機にし、「見」あるいはそれに類する語（実線部）を含んだ歌をわざと配したのであろう。二人が逢瀬をもつまでの遣り取りにはそのような語句が含まれていなかったものと想像される。

さて、続く87 88番には「見る」という語は出てこない。その作歌事情と内容を見てみると、87番では伊尹の訪れが「ひさしうて」（詞書）、女が「おもふといひて心がはりか」と言ってくる。また、88番では女が「こゝろよりほかにもちかはせたましか」（詞書）と言ってきたのに対し、伊尹は「神かけてまたもちかへといひつべしおもひおもはずきかまほしさに」と答えている。ともに伊尹が女を「思う」と誓ったのにも関わらず夜離れが続くので、女がそれを詰ってきたようである。ところで、伊尹が誓ったというのは、とりもなおさず、83番

歌の「おもふにはみづだにもらぬものとこそきけ」を指すのではなかろうか。83番歌は『一条摂政御集注釈』の指摘するように、『伊勢物語』二十八段の「などてかくあふごかたみになりにけん水もらさじと結びしものを」を踏まえていよう。従って、伊尹の言わんとするのは、「深く思えば水は漏れないものだと言う。私は水が漏れないぐらいに深くお前を愛する。」ということになる。つまり、伊尹は女のことを深く思うと誓っているのである。その誓いを87 88番で破ったわけであろう。以上のように考えると、87 88番にきて83番の「おもふ」（波線部）を踏まえた歌二首が配されているのがわかる。そう思って81 82番を遡って見てみると、81番詞書に「おぼしかけて」、歌に「おもほえず」、82番歌に「おもはぬ」と、「思ふ」やそれに類する語（波線部）が出てきている。

このように、81～88番までは「見」に加えて「思ふ」という語をも軸にして歌が配列されているのである。

これらに続く89番以下は、90番歌に「おもふに」（波線部）が出てくるので、ここまで「思ふ」という語の連想で繋がっているのかも知れないが、また別の配列意識も伺える。それが破れるのを嫌って、94 95番の「ふるとしの御仏名」の贈答を、93番の「正月二日」の贈答の後に配したのだと思う。即ち、89 90番の贈答と91 92番の贈答はともに「つとめて」（点線部）で、作歌時間を共通する。また、92番と93番はともに「うぐひす」（二重傍線部）が詠み込まれる繋がりがある。さらに、91 92番は春風を詠み込んでおり（傍点部）、春の季節感でも93番と繋がる。なのに「御仏名」の際の94 95番を時間通りに間に挟めばどうなるであろうか。

それを考える為には、正月二日に詠まれたとわかる93番以外の91 92番と94 95番も何日に詠まれたのかはっきりさせたいところである。しかし、この歌群は、九五六（天暦十）年かも同年をそれ程下らない頃のものだろうとは言えるとしても、何年のものと特定はできない。年内立春はある年とない年があるし、あるとしても一定の日でないのは勿論だ。「御仏名」も一二月一九日頃ではあろうが、一定していなかったようだ。ちなみに、九五六（天暦十）年から翌年にかけての贈答だとして、『日本暦日便覧』[43]を参照しながら81番からの時間をおうと次のようになる。九五五（天暦九）年七月二七日伊尹は左近衛権中将になり、九五六（天暦十）年三月二四日からは東宮権亮も勤める。81～84番の贈答は三月二四日以降とみられる。85番がいつ詠まれたか伺える徴証はない。86番は、『一条摂政御集注釈』が考証するように、一一月下の酉の日に行われる賀茂の臨時祭の際のものと考えられるから、一一月二一日とみられる。[44] 87～90番もいつ詠まれたか伺い知れない。91 92番の贈答は年内立春のあった翌朝だから一二月二九日である。そして、一二月三〇日に女が里に下がり、翌年正月二日に詠まれたのが93番である。ここで時間が遡り、94 95番の贈答は前年の仏名の時だから一二月一九日頃となろうか。この年の仏名の記録は残らないが、年内立春の一二月二九日よりは前であろう。さて、別の年だとしても、93番が年明けて

からの詠歌で、91 92番、94 95番は年内の詠歌だから、時間順序通りに配すれば、94 95番は91 92番より前か91 92番と93番の間に入るのは確かだ。そうすれば、先程指摘した「つとめて」や「うぐいす」の連続、あるいは春の季節感の連続を断ち切ってしまう。為に、仏名の贈答は後に廻されたのである。（今示した九五六〈天暦十〉年の例のように、年内立春があるとすると、仏名より後の可能性が高かろう。）

このように、81番以下でも作歌時間による順序なども無視し、適当に歌が並べられているようだが、実は何らかの連想のもとに歌が配列されているのが分かると思う。

以上に加えて、この歌群では詞書の文体の面でも物語的な特徴を有していることも指摘しておく。

まず、この歌群には活用語の終止形、または連体形で終わっている詞書が「ものにかきたまふ」で終わっている81番、「もておはしたる」で終わっている83番、「はこのうへにかく」[45]で終わっている85番の三例見られる。他撰部の詞書は注記的言辞を含む場合を除けば、ほとんどが「に」「ば」「て」などの助詞で終わっていて、活用語で終わるのは、他撰部後半部㊥〈別本本院侍従集〉を除けば六例ほどしかない。それが、ここでは三例も見られるのである。しかも81番と85番の二つは終止形で終わっているが、このような例はあとは他撰部後半部㊥にしかない。連体形で終わっている場合には後に「歌」などの言葉が省略されているものと思われ、歌集の詞書にはよくあるものである。しかし、終止形で終わるのはむしろ物語の文体に近いと言えると思う。

加えてこの歌群には、詞書が二つの文でできている例が93番にみられる。（89番も「いかゞありけん。つとめて」とすれば二文である。）これも他撰部中では非常に珍しいもので、注記的言辞をもつ場合と他撰部後半部㊥を除けば、あとは99番詞書があるだけである。勅撰和歌集をはじめとして、歌集の詞書は一つの文でできているのが普通なのを勘案すれば、これも文体としては物語に近いと言えよう。[46]

さらに、83番の詞書相当部分を再び見てみたい。ここでは前の歌を格助詞「と」で受け、しかも次の歌にも自然に繋がっていっている。換言すれば、一つの文で前の歌の後書と次の歌の詞書の役目を同時に果たしているのである。ということはこの部分では、歌が歌として独立し、詞書が詞書として独立しているのではなくて、両者が一連の話の中で融合してしまっているのである。このような書き方も、歌集よりもむしろ物語の文体に近いと言えよう。

また、85番は「かへしはなくて、ようさりおはしたりけり。」という後書をもっている。これも、詞書とは違い後書としては普通かも知れないが、「けり」という活用語の終止形で終わっている。それはともかく、この後書は、伊尹が返歌をせずに夕方やってきたという話の内容の一部を物語っている点で特徴的である。というのは、他撰部にある他の後書は、151番の「これまでみな本院の」のような、編纂者の立場からの注

記書きが多いのである。85番後書のような例も歌集の後書には珍しく、むしろ物語の一部を髣髴とさせるものである。後書と言えば、86番にも「かへし、さわがしくてえきかず。」があるが、これは先に指摘した65番の「そのほどのことゞもおほかりけれどかゝず。」同様、物語的言辞を用いた省筆の可能性もあると思う。

以上のように、81番以下の歌群では物語的と言ってもよいような文体的な特徴が見られたわけであるが、実際このような例は物語的な「とよかげ」の部ではあちらこちらに見受けられる。試みに18番詞書から数首の詞書・後書を引いてみる。

18　このおきな、かくいひつゝ、心やすくもえものいはぬことをおもひなげくに、またあらはれたる人もあれば、それにもつゝむなるべし。つねにもえあはで、からうじて
　つらかりしきみにまさりてうきものはおのがいのちのながきなりけり
　つゝむ人あるをりにて、かへりごともなかりけり。

19　おきな、つねにうらみて、「人にはいはずいはみがた」といへりければ、女
　いはみがたなにかはつらきつらからばうらみがてらにきてもみよかし
　といへりけれど、をとこありければ、えいかず。

このをんな、とよかげにかくしのびつゝあるも、びなき人にやありけん。きく人のいみじういひければ、「このことやみなむ」などちぎりて、あしたになほかなしかりければ、をとこにやりける。

20　わすれなんいまはとおもふをりにこそありしにまさるものおもひはすれ
　これをとよかげひきあけてみるに、さらにいふべき心ちもせず。あはれにいみじとおもひて、一日二日さしこもりてなきけり。

（中略）

24　おきな、にしの京わたりなりける女にものなどいひて、ひさしうなりにけれど、かへりごともせざりければ、をとこ
　としふればありし人だに見えなくにつらき心はなほやのこれる
　となむいひやりたりけれど、かへりごともせざりければ、おなじ人のもとに

25　しらゆきはほどのふるにもつもりけりかつはおもひにきえかへりつゝ

これらの中で、18番と20番詞書が二つの文でできている。また、19番後書は前の歌を「と」で受けて直接つながっている。そして19番後書も含めて、話の内容を語っている後書が18番

と20番に見られる。加えて、25番の詞書部分の一文は、詞書と後書を兼ねている典型的な例となっている。

このようにみるならば、81番以下の文体は物語的な「とよかげ」の部に似通っていると言えると思うのである。

以上、この歌群は構成の面と文体の面で物語的な要素を持つことを指摘しておいた。

【注】

(39)『一条摂政御集注釈』も、「「もる」には「見守る」（みかわす）の意がこめられているようでもある。」と指摘する。

(40)「みかさの山」は近衛府の官人の異名であるが、この場合は、左近衛権中将を勤める伊尹を指す。伊尹は九五五（天暦九）年七月二七日より同職にある（『公卿補任』による）。

(41)『公卿補任』による。

(42) 同じようなことが『伊勢物語』九十五段でも見られるので全文を引用しておく。（『伊勢物語』からの引用は、「日本古典文学大系」（大津有一・築島裕氏著、一九五七年一〇月・岩波書店）による。以下、同じ。）

むかし、二條の后につかうまつるおとこ有りけり。女の仕うまつるを常に見かはして、よばひわたりけり。「いかで物越しに對面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさん」といひければ、女、いとしのびて、物越しに逢ひにけり。物語などして、おとこ、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる關をいまはやめてよ

この歌にめでてあひにけり。

この話では結局女は男の秀歌に感動して打ち解けてしまうのであるが、それまで「見かは」すことはあっても男の「よばひ」を拒み続けていたのは、ともに二条后に仕えている二人の立場を配慮してのことであろう。だから物越しに逢う時にも「いとしのびて」だったと思われる。これと同じような配慮を「東宮にさぶらひける人」もしたとおぼしい。なお、この『伊勢物語』九十五段の「見かはして」の部分を「日本古典文学大系」の頭注の「互に逢って通い続けていた。」のごとくに訳す注釈書もあるが、この話の眼目は明らかに男の秀歌によって女が初めて肌を許す気になったところにあり、このような訳はあたらない。例えば、「日本古典全書」（南波浩氏著、一九六〇年七月・朝日新聞社）が「常に顔を見交はして親しくなり。」と訳しているような意味が妥当である。なお、久保田淳氏は注34著で、「さすがにこゝろのまゝならで」は、周りの人目を気にしている事情をうつしているとみる。

(43) 湯浅吉美氏著、一九八八年一〇月・汲古書院。

(44) 九五六（天暦十）年の賀茂臨時祭の記録は見当たらなかったが、中止の記録もないので行われたものとみてよかろう。仏名も同じ。

(45) 「かく」は「斯く」の意にも解せそうだが、「書く」ととった。なお、「斯く」の意であっても、他の詞書なら「はこのうへに」で終わるのが普通であり、このような副詞をわざわざつけている点でこの詞書は特異であると言える。

(46) このあたりの検討は、山口博氏「元良親王集の物語性」（『平安文学研究』25・一九六〇年一一月）に負うところが大きい。山口氏は『元良親王集』が物語的である要素を具体的に指摘する為に詞書について検討し、複数の文でできている詞書や終止形ないしは係助詞の結びの連体形で終止する詞書（山口氏は「詞書が歌の直前で切れる終止法形式」と呼ぶ）の例を引用した後で、「此の様に本集の詞書は、歌より独立の趨勢がかなり強いのであるが、遂には詞書中に「よめる」「聞ゆ」「遣りける」などの語を含まない、換言するなら、次に歌のくる事を明示しない場合が現われる。（略）詞書と歌とが独立し、詞書が主で歌が従であるとさえ思われるのである。」などの特徴がある点に注目している。